

しもきた学講座

斗南藩基礎講座

第3回 斗南の生活

—荒川勝茂の『明治日誌』をもとにして—

日時 令和5年1月19日(木) 18:30~19:30
場所 下北文化会館大集会室
講師 斗南會津会会員 三浦 順一郎



釜臥山から見た大湊湾

主催 むつ下北未来創造協議会事務局

斗南藩基礎講座

第3回 斗南の生活

—荒川勝茂の『明治日誌』をもとにして—

斗南會津会会員 三浦 順一郎

1. はじめに

斗南を不毛の地と揶揄したが、そこには人々が生活していた。彼等は記録を残した。また会津藩士にも記録を残す人がいた。それらをもとに藩士は斗南でどんな生活をしたのか見ていく。

斗南藩の少参事を勤めた永岡久茂は斗南藩の将来を願い、漢詩を作った。

明治己巳年明治二年我会津藩は斗南に遷され感あり。

* 己巳(つちのとみ)

何料死灰不再燃 (何ぞ料らん死灰再び燃えざる)

乗除元自有天禄 (乗除は元自り天禄有り)

斗南港上十年後 (斗南港上十年後)

欲繫五洲々外船 (五洲々外の船繫がるを欲す)

【死灰は再び燃えないと思ったのに、結局天のお恵みで斗南藩ができた。斗南港(大湊港)に十年の後には、五大洲の船を繫ぐことができよう。(相田泰三訳)】

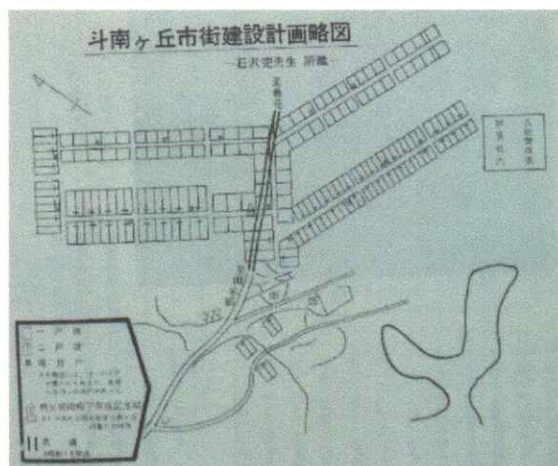


永岡久茂

2. 市街地造り

妙見平(後に斗南ヶ丘と称す)に、1戸建30棟と2戸建80棟の長屋(第一新館)を建設した。一番町から六番町まで六条の大通りを設け、これに屋敷割をした。一屋敷百坪として土堀をもって区画した。東西に大門を建築し、門内の乗打ちを禁止した。18ヶ所に堀井戸を造った。

また、松ヶ丘(県立むつ工業高等学校の西側一帯)にも、30棟の長屋(第二新館)を建てた。



葛西富夫『斗南藩史』より



井戸跡の標識

3. 入居前の長屋の大惨事

斗南ヶ丘(妙見平)に建設中の長屋の屋根が、明治3年午9月18日(新暦1870年10月12日)の夜中から翌19日まで吹いた大風で吹き飛ばされた。

一 明治三年^{うま}午九月十八日夜中より十九日^{まで}昼八ツ半頃迄、アエ(あい、南)^{したかぜ かぜはげ}下風大風烈し、諸方^{しょほう}にて屋根はがれ、就中^{なかんずく}、柳町^{いず}何れも丸屋根はがれ候方^{そうろうかたしよしよ}諸々^あこれ有り、樹木^{みょうじんさま}たおれ、明神様^あ玉垣石^{たまがきいし}の方^{まがきいし}倒れ、妙見^{みょうけん}平^{いらしん}新御長屋^{おながや}八十棟^{やそ}これ有る分^{ぶん}、暮頃^{くれころ}、御役方^{おやくがたならび}并に市中^{にんそくめ}人足^つ召し連れ、見分^{けんぶん}に罷り越^{まか}し候所^こ、壱棟^{そうろうところ}も残らず^{いっとう}屋根はがれ、便所^{べんじょ}飛ばされ、かなりの分^{ぶん}十七棟^{じゅうしち}これ有る由^あ、赤坂^{あかし}下^した迄^{まさとびち}桁^{うけ}飛散^{おい}り候^{かた}よし、請負^{うけ}方^お大迷惑^{おいかた}、大損分^{だいそんぶん}の事也^{ことなり} 『村上権兵衛日記』

(明治3年午9月18日の夜中から19日昼八ツ半頃迄、あい風(南風)下風の大風が烈しく吹き、諸方で屋根が剥がされ、とりわけ柳町はどこも丸屋根が剥がれた所があった。樹木は倒れ、明神様の玉垣石が崩れた。妙見平の新長屋は80棟あるが、そのうち、暮頃に御役人ならびに市中の人足を召し連れて見分に参ったところ、1棟も残らず屋根は剥れ、便所は飛ばされ、まづまづのものは17棟あるとのことである。赤坂下まで桁が飛散った。長屋の建築を請負った方にとっては大困惑であり、大損害の事である)

長屋が粗末な造りであったからでない。途轍^{とてつ}もない強風が吹き荒れたと考えるべきであろう。

明治3年10月に1戸建30棟と2戸建80棟が完成し、200戸が入居した。すべての藩士が入居することはできなかった。家屋は1戸建が3間に5間、2戸建が4間半に7間の広さであった。

荒川勝茂は、この長屋を掘立小屋で屋根は木羽板(削りとった薄い板)をふいたものと記した。手代木喜与は名ばかりの家・急造の小屋といい、柴五郎はバラックの掘立小屋と称した。

4. 斗南の地 『明治日誌』

あらゆる書物が斗南を不毛の地と書き立てる。果たして斗南は不毛の地だったのだろうか。

斗南に移住する藩士の世話をした藩士に、荒川類右衛門勝茂(天保3年～明治41年、1832～1908)がいた。勝茂は克明に日誌を書いた(『明治日誌』)。

(1)借間住まいと長屋

斗南ヶ丘の長屋が完成する前に、藩士は隣村の農家に割り付けられた。また空き家を借りて住んだ。荒川勝茂が借りた田屋村の平七宅は次の通りであった。

一 同人ノ宅ハ上ノ間八畳床ノ間付袋戸付、三尺縁通リアリ、次ノ間ハ八畳、又次ハ十畳、右三間ヲ借受、勝手ハ其外ナリ、宿ノ家ハ三人、何分言語通セサル事多クアリテ困難ス(平七宅は上の間が8畳 床の間付き袋戸付き、3尺の縁側が通っている。次の間は8畳、又次は10畳、右3間を借り受け、勝手は其外である。平七の家は3人である。何分言語が通じない事が多くあって不便である)

荒川家は8人家族であった。

(2)開墾の苦勞

原野を開墾し、芋、大豆や蕎麦、大根の種を蒔いた。餅粟の種を蒔いたが、隣家の馬に食われた。収穫は1升ばかりであった。収穫した大根を150本ほど収穫した。ところがまた隣家の馬に50本を食われてしまった。藩から借りた青毛7歳の奥戸馬が病死した。

(3) 食べ物

斗南は畑作が中心である。寒冷地のため米が獲れず、稗が主であった。藩士をゲダカ(毛虫)、ハドザムライと酷評した地域もあった。浜の近くに居住する藩士は昆布や蛤を採集した。川の鳥貝も食した。

柴五郎は両二本柳家と新田家からの援助を受けた。常食の稗飯も満足に食べられなかった極貧状態であった。蕨、蕨、アサツキ、オオバコ、木の芽、草の根、オシメ(昆布を砕き、稗を混ぜて粥にした)、犬の肉と食べられるものはなんでも食べた。

当地方、日々ノ食物ハ稗ノミ食用トス、貧民ニ至レハ稗ヘヲシメコンブヲ臼ニテ搗キ製シタルモノ、ト云フヲ過半雜ヘ炊ク、此ノ土ニテ産スルモノハ大根、五升芋ト称ス、会津ニテ云フ砂芋ナリ、之ハ其味、実ニ美ナリ、其他豆、其余ハ何モ出来ズ。只百合ハ味美ナリ、大ナルハ円径五寸ニ及ブアリ、米ハ一切出来ス、土地ノ住民、米食ハ正月盆其他病人ノ外常ニ食スルモノナシ

* 五升芋・砂芋は馬鈴薯、ジャガイモの異称

(当地方で毎日食するのは稗だけである。貧民にいたっては稗にヲシメ コンブを臼で搗いてつくったもの というものを半分混ぜて炊く。此の土地で産するものは大根と五升芋と称す、会津で云う砂芋である、これは実に美味しい。其の他に豆を産す。あとは何も出来ない。只百合は味がよい。大きいものは直径15cmになる。米は全然出来ない。土地の住民は米を正月と盆しか食べない。其の他は病人に食べさせるくらいである)

① 蛤拾い 明治三年八月六日 (新暦 明治3年9月1日)

今日、外島、笠尾誘引ニ付、浜辺へ蛤拾ヒニ子供不残引連レ行キシニ、俵へ壺俵拾ヒ得タリ、保養ヲナシ帰宅ス

② 蕨餅 明治三年八月 (新暦 明治3年9月)

此土ノ村民、農事ノ暇ニハ蕨ノ根ヲ堀リ、花ト唱ヒ、餅ヲ製ス食用ニ充ツルヲ事トス、我家内、

此村ニ在テ村人ニ之ヲ製スル事ヲ習ヒ、数度蕨根ヲ堀リ採リ製ス、味ヒ甚タ美ナリ、母殊ニ好メリ、但シ、蕨餅ナリ

③ タン貝採り 明治三年十月廿日 (閏 明治3年12月12日) * タン貝(淡貝、烏貝)

於定(おさだ、長女)秀太郎、今日川狩ニ出テ、タン貝を壺俵拾ヒ取り候、何レモ大ナリ

④ 蕨採り 明治四年五月十三日 (新暦 明治4年年6月30日)

今日、家内^{おき}採ニ行ク、其フキノ大ナルニ驚キタリ、長ヶ四尺位、太サ壺寸径位、葉ノ大、サシ渡三尺位、傘ノ如シ * サシ渡(差し渡 さしわたし、直径のこと)

⑤ 昆布布拾い 明治四年三月十五日 (新暦 明治4年5月4日)

今日、外島誘引ニテ家内浜辺ニ行キ、昆布拾ヒ致シ、俵ニ壺俵余拾ヒ取り候後、数度採リニ参ル

(4) 地域住民との交流

荒川勝茂は当初、青平村(東通村上田屋)の平七宅に下宿(8ヶ月間)した。家主の平七が村外れまで勝茂達を出迎えた。地域住民と交流があり、祭りに招待された。しかし囃子の言葉はわからなかった。

① 鎮守祭りに招待 明治三年九月十六日(新暦 明治3年10月10日)

田屋村鎮守祭礼ニ招カレ、山本一同参リ見ルニ、村ノ若者老人ヲ招待シ酒ヲ出ス、我モ大ニ馳走ニナル、若者共花笠ヲ持テ踊リ、太鼓、笛、打鉦ヲ以テ拍子ヲ取り、舞ヒ踊ル、歌等ハ一切分リ申サス

* 上田屋熊野神社 祭礼日 9月16日・17日

② 妙見明神祭りに招待 明治四年四月(新暦 明治4年5月) 祭礼日 5月17日

妙見平妙見明神祭礼ニ付、草餅搗ク、元寄宿ノ大平村ノ家内其他、田屋村ノ者参リ酒出ス、
又田名部ノ男女、酒、重詰等ヲ持参ニテ御長屋へ参リ、大ニ賑々にぎにぎしく敷候

(5) 荒川勝茂の家族と死

① 息子の死

十一月九日 (新暦 明治3年12月30日)

三男乙三郎病死ス、青平村ニ葬ル

* 三男の乙三郎が6歳で病死した。医師に診てもらえない土地であった。

② 7人家族 * 明治4年1月15日 (新暦 明治4年3月5日) 現在

戸主 勝茂(40歳)

母 カヨ(62歳)

妻 ミヨ(34歳)

長男 秀太郎(11歳)

二男 乙次郎(8歳)

長女 サタ(16歳)

二女 キチ(12歳)

③ 母の死

八月九日 (新暦 明治4年9月23日)

一 母様十日計以前ヨリ惣身腫レ御勝レナサレス、日々御看病致シ居リシ所、今朝五ツ半頃ヨリ重ラサラレ医者モ居ラヌ土地ナレハ、如何ニトモ致スヘキナシ、此夜、寝スニ看病ス、夜明ケテ少々粥ヲ食セラレケレハ、少シク御快方ニナラセラルト喜ヒ、兼テオハキヲ好マレ候ニ付、出来上ルヘシト云ヒ、ハハ(母)ハ旨カルヘシトノタマフニヨリ、直ニ用意ニ取カカリケルニ、コハ如何ニ、俄ニ塞カレ、呼ト叫ヘト御答ナシ、隣家ヨリ氣付等ヲ持参、御口ヘフクマセトモしるし験モ更ニナシ、家内挙テ悲嘆ノ涙泣ヨリ外ノ事ハナシ、ああ吁悲カナ、無常ノ風ニ誘ハレ給ヒよみ黄泉ノ客トナリ給フ、去トテ帰ラヌ事ナレハ、先ツダンゴ、オハギヲ出来テ御供トス、之レ九日昼四ツ半時ノ頃ナリ

同九日 但、角久平ニ板請ヒテ御長屋住、田中ニ頼ミ棺カ出来入棺ス

母カヨが62歳で死んだ。母思いの勝茂は常念寺へ行って、清光院の戒名を請うた。十日に常念寺から僧一人が来て、読経した。埋葬地は斗南岡才花(最花)御渡の場所であった。人足は才花村から雇った。

一 我嘆息シ、係ル身ニモ相ナラズハ、父上ト御同様ノ御吊モ可致ニ、哀レニモ余リアリト共ニたもと袂ヲ絞リケル

会津で祖父の葬儀ができた。しかし、ここでは野辺の送りもままならなかった。

一 今日、清光院様一七日ニ付、オハキヲ製シ御供へ、且ツ近所へ御返シノしるしばかり験計トオハキ遣

ス

(6)冬の斗南ヶ丘

斗南ヶ丘は風が強く、冬は豪雪に見舞われた。粗末な家屋であるから、雪で屋根が落ちたこともあった。以下の如く、すごい豪雪地帯であった。

明治5年12月5日(新暦1月3日)

***太陽暦に改暦 12月3日が1月1日**

一 斗南ヶ岡ハ恐山ノ裾野ニシテ、高峯ヨリ吹下ロス嵐常ニ強ク、十月末ニ至レハ、日々烈ク、動モスレハ疾風吹来リ安眠スル能ハス。家屋ノ板ヲ飛シ、或ハ屋上ニ木羽押ヘニ揚ケ置ク石ヲ転シ落ス等ハ常ナリ、然ルニ今夕刻ヨリ風漸々烈シク相成、夜四ツ時頃ニ至リ頓ニ暴風吹き来リ、家ノ冬囲ノ丸木五本、一度ニ折ルルト共ニ、外障子四本皆折ルルト見ヘシカ、屋上ノ木羽板皆剥キ飛シ、押ヘノ石ハ座中ヘ落、雪ハ忽チ家中ヲ埋ミ、家内将ニ寒エ死ナントス、仍テ小児ヲ背負ヒ、家内布団ヲ一同被リ立抜カン、家外ニ出レハ、積雪五尺ニ余レリ、皆跣ニテ暗サハ暗シ、足ニ任セテ十五間隣家ナル山本ノ方ヘ駆込ミ、叫ヒテ助ヲ乞フ、山本云ク、早ク入りテ今折ンスル障子ヲ押ヘヨトアリケレハ、共ニ力ヲ勤セ、五人ニテ之ヲ押ヘ夜ヲ明セハ、風モ漸ク静マリタリ、此日ハ山本ノ賄ニ与リ凌キタリ

但シ、御長屋破損甚ク、且ツ老人小児雪ニ埋マリ、家ノ内ニテ死シモアリ、追々田名部役人モ下リ検査之アリ、亦、近村ノ人夫援ノ為出来リ、手勢ヲ得テ、自家モ雪ヨリ堀り出シ屋上ヲ修繕シ、六日ヨリ七日ニ至リ家ノ内外ヲ修メ、夕刻家ニ入りヌ、戸障子破損出願シ新ニ御渡ニナル

(斗南ヶ岡は恐山の裾野にあり、高峯から吹下ろす嵐は常に強い。10月末になれば日ごとに激しく吹き、ややもすれば疾風になり、安眠することができない。家屋の板を飛ばし、或は屋上の木羽板を押えるために揚げて置いた石を、転し落す等は常であった。今夕刻より風が漸々激しくなって、夜10時頃になってとみに暴風となった。

家の冬囲いの丸木5本を一度に折ると共に、外障子4本を皆折るように見えた。屋上の木羽板を皆剥ぎ飛ばし、押えの石は座中へ落ちた。雪は忽ち家の中を埋め、妻は今にも寒え死にそうになった。そこで子供を背負い、妻は布団を一同にかぶせて出ようとした。

家の外に出ると雪が1・5m以上も積っていた。皆はだして暗い中を足に任せて27mの隣家の山本氏の方へ駆込んで、叫んで助を求めた。

山本氏が云う。家の中に早く入って、今にも折れようとする障子を押えろ。そこで共に力をあわせて、5人でこれを押えて夜を明かした。ようやく風も静まった。此の日は山本の助けでしのごうことができた)

(但し、御長屋の破損はひどく、且つ老人と小児が雪に埋まり、家の内で死んだ者もあった。順を追って田名部から役人も来て検査をした。亦、近村の人夫が応援に来た。手勢を得て、自家も雪から堀り出し、屋根を修繕した。6日から7日にいたって家の内外を修繕し、夕刻に家に入った。戸、障子の破損箇所を届け、新しいものを御渡しになった)

5. 困窮する藩士 『明治日誌』

(1) 貧困が招いた夫婦の悲劇

藩士の悲惨は食料や病氣ばかりでなく、別のものもあった。

笠原家は生活が貧しく、夫婦喧嘩が絶えなかった。会津から持参した稲荷様の御利益は全く無かった。勝茂は夫婦の諍いを仲裁したが、夫婦は遂に離婚した。川に流そうとする御神体を、勝茂がもらい受けた。次の年から荒川家は御利益にあずかった。妻は稲荷様をますます信仰するようになった。

同廿四日（明治4年6月24日 新暦 明治4年8月10日）

一 笠尾八重八家内、不和ヲ生シ、拙者参リ種々相論シ候へ共、終ニ家内離散ノ事トナル、然ルニ笠尾会津表ヨリ屋敷ノ稲荷明神堂ノ儘ニ当所へ持参ノ所、我ヨリ前ニ青平村ヨリ新建へ移住ノ折、右神社我ニ預リ呉ヨト申ニ付預リタリ、然ルニ笠尾、今日参リ右神社入用ナシ、川へ流スト云フ、依テ我貫受、荒川家守護神トシ祭ル、其後米ニ不足ナシ、家内益信心ス

(2) 杉木を盗伐した旧藩士 『萬日記』

明治五壬申年六月十六日 晴大暑（新暦 明治5年7月21日）

今日手前植立て杉盗み切り候者、捕押さえ候処、元斗南藩の者にて、式尺式寸廻位の五本鋸にて切取り候旨、白状涙を流し、母並びに家族養ひのため、面目次第之れ無く、内済用捨下され度き願ひにて、不便に存じ、一札取り、此の度計り用捨致し候事

（今日、私が植立てた杉を盗み切りした者を捕えた処、元斗南藩の者であった。2尺2寸廻位の杉5本を鋸で切取った。白状して涙を流し、母並びに家族を養うためにした、面目次第もない。内輪でゆるしてほしいと願った。そこで気の毒に思い、一通の証文を書かせ、此の度だけは許すことにした）

(3) 贖札づくりをした旧藩士 笹澤魯羊『宇曾利百話 増補三版』

明治4年8月26日（新暦 明治4年10月10日）に田名部苦生野の並木外れで、贖札づくりの6人の元斗南藩士が打ち首にされた。贖札は会津戦争後に会津で行われた。斗南に移住後に発覚し、佐井村で召し取られた。佐藤雪之介、長岡信治、北見金蔵（40）、赤羽平助（39）、加賀勇吉（36）、森金甚太郎（30）

(4) 舅の願い

同（七月）廿三日（明治4年7月23日 新暦 明治4年8月9日）

舅樋口安之丞大病、十死一生ニ付参リ候様書面来ルニ付、於ミヨ一同未明出起、川内ニテ中飯、七ツ半過宿ノ辺へ着ス、直ニ面会ス、息絶ヘントス云フ、我モ之切リナリ是非跡嗣ニ乙次郎ヲ貫受度趣ナリ、我夫婦直ニ許諾ス、然ラハ直ニ養子ノ願書認メヨト有ケレハ、認メ之ヲ読ム、大ニ喜ヒ程ナク落命ス、悲メトモ帰ラス、翌日、葬式ヲ営ミ、同廿五日ノ暮六ツスキ帰宅

ス、但シ、後云々^{うんぬん}ヲ生シ養子此事止ム

6. 荒川家が斗南ヶ丘を出立 『明治日誌』

勝茂は斗南で生活していくことを望んだ。妻がいろいろと生活の手立てを探したが、見つからなかった。そこで会津若松に2ヶ年の出稼ぎに行くことにし、役所に願ひでた。但し全員の出稼ぎは許可にならなかった。長女のサタを残さなければならなかった。

同廿一日（新暦 明治6年4月21日）

一 弥^{いよいよもっ}以テ明日若松へ出起セントス、仍^{よっ}テ母上ノ御墳墓、家内一同参拜シ、其他兼テ親シク致セシ方へ暇乞ヲナシ、家内用意ヲナシニケル

同廿二日
斗南ヶ岡ヲたちける折に

馴れぬれはさすが名残を惜しむなり斗南ヶ岡の賤^{しず}か伏屋も
住み慣れし里とおもひはさすがまた斗南ヶ岡も今日そたちうき

一 近隣ノ人々、送別トシテ訪ヒケレハ酒酌^{しゅしやく}換ハシ、五ツ半時出起ス、其^{みぎり}砌、我詠セシ 歌乞ハ
レケレハ直ニ認^{したた}メ、暇ヲ告テ別ル

福島県の強清水に着いたのは、明治6年5月19日であった。斗南ヶ丘を出てから28日目であった。

(1)会津若松に帰ってからの荒川家の家族

長男 秀太郎 明治7年8月16日 痢病(はやて)で死亡
先妻 ミヨ 明治8年5月11日 血方で死亡
長女 サタ 明治8年6月 1日 胃病で死亡

(2)勝茂の再婚 明治9年5月2日

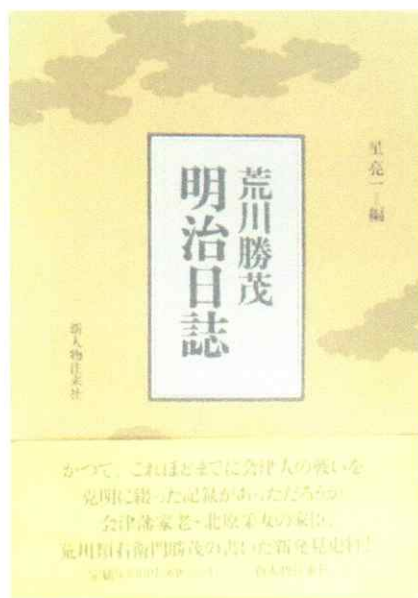
後妻 ヤイ 旧藩士大竹良輔長女
四男 湊 明治10年6月10日生 (後に功と称す) 後年 ヒデと結婚
五男 力 明治12年9月1日生
六男 四郎 明治14年11月20日生
七男 栄 明治19年7月13日生

(3)勝茂は小学校教師をする

勝茂は学識があったから、教師として最適であった

(4)勝茂の死去

明治41年8月9日 享年77歳



斗南ヶ丘

會津藩が吾が下北に移封されたとき移住して来た総戸数は六十百戸あつた越後の新潟に出て新潟から佐井とか大畑とか大湊どかに上陸し又は野邊地に上陸して更に牛の背などで此の下北に來たものである其の内二百戸ばかりは田名部の郊外に落ち着いた斗南ヶ丘はそれである其處には立派な市街が出來て一番町から六番町まであつて町の入口には大きな門があつて當時住居して居た戸主の名は次の如くであつた

山口澤右工門、東平治
 矢野三郎、吉村左次右工門
 笠尾八重八、山内仲
 手代木勝任、柳下源八
 松澤喜也、町野源左工門
 野村寅三郎、草刈柳八
 西岡茂、馬場忠藏
 赤岡豊次郎、玉木徳太郎
 大竹源次郎、原喜八

荒川勝茂、大東救五
 齋藤重之助、龍造寺豊太郎
 今村金右工門、高影太八郎
 赤羽達平、五十嵐健之助
 佐藤熊治、山浦壽次郎
 光岡源次郎、渡邊四方之助
 星安次郎、竹山徳三郎
 齋藤六三、伊與田爲義
 東海林雄吉、樋口仙吾
 川井八次郎、小町屋庄藏
 一柳盛之丞、小島與五右工門
 鷹簀哲伍郎、中村昌人
 町野源之助、野々村繪之助
 金澤亥熊、福田清吾
 穴澤九平、大内豊治
 若林金兵衛、山浦辰之助
 伴野治助、戸枝生次郎
 齋藤林藏、大和田龜吉
 松田小三郎、中澤眞七
 芳賀初治、淺岡新太郎
 西川俊治、赤羽源兵衛
 鈴木喜藏、荒川久治
 金指忠吾、田村數馬
 齋藤庄吾、赤羽勝吉
 辛嵐忠三郎、大槻清六
 遠藤重五郎、吉川俊兵衛
 吉川敬治、遠藤萬作
 星市右衛門、本名勝吉
 橋原友治、佐藤千代吉
 吉川孫左衛門、星總次郎
 佐藤新作、惡原茂
 高木弟三、石山恒吉
 岩田清左衛門、細谷萬吾
 谷川九郎、町田傳八
 安部井浩之進、竹村俊秀
 渥味直茂、根津近藏
 坂本寅次郎、上田次久
 風間久藏、植村八五郎
 島貫勇藏、鈴木武

大村和度、大石岩助
 川田健藏、鈴木照義
 栗原敷右衛門、石井久兵衛
 佐々木泰温、岡本貞藏
 狩野勇太郎、新井田雄治
 町野傳藏、大竹源太郎
 川井武三郎、津田純吾
 角久平、柳田清海
 佐藤金右工門、大堀忠八
 戸枝平藏、原俊直
 篠田須、齋藤幸之助
 遠山直記、鈴木源次郎
 神田九八郎、柳田穀
 山本榮門、鈴木親
 武井多門、長谷川萬次郎
 小林又太郎、齋藤新次郎
 山口藤次郎、田中新助
 櫻井政衛、船木庄左衛門
 高島新八、宮津磯之助
 安田利八、高木盛徳
 木村藤吾、伊藤珠彌
 長谷川力之助、木村世佐工門
 猪俣秀次郎、西村延八
 大島源左衛門、柳木久右衛門
 一柳伊右衛門、伊南源助
 石山九八郎、齋藤八兵衛
 三宅權八郎、澁田先之進
 小檜山彌助、相川清之進
 佐藤元太郎、大竹庄吾
 二瓶勝治、合山忠義
 高橋勇次郎、船田忠鷹
 岡代吉、大垣辰三郎
 弦木又藏、平山荻之助
 赤井ゆき、相澤七右衛門
 管五兵衛、内田保
 長山治八、若林源左衛門
 石井政庫、渡部勝助
 川崎丑次郎、樋口久吾

松ヶ丘

會藩が吾が半島に移封された際に田名部の斗南ヶ丘に相對して大湊には松ヶ丘が出来たのであつた
 大湊、大湊、城ヶ澤を通じての會藩人の住宅に對して松ヶ丘何番屋敷々々を總稱したのであつたけれども
 其の本陣といふべきものは恐山街道に當る大湊の落の原にあつたものである
 其處は荒川の清流を引いて之を中央に兩側に相向つて立派な新住宅が建設されたのであつた此所に仕居してゐた人の中で關嶺忠武といふ人の息で不二彦氏は後に醫學博士となつたが當時は僅に八歳の少年であつた尚ほ序でに當時松ヶ丘の総屋敷中に仕居してゐた戸主達の氏名を掲げると次の通りである

- | | | | | | |
|---------|----------|----------|---------|---------|--------|
| ▲大平 | 小山三郎 | 住 片岡長範 | ▲川守 | 武田寅之助 | 住 平石りの |
| 古川恒次郎 | 山村又兵衛 | 丹生谷友勝 | 後藤磯右工門 | 五十嵐源治 | 五十嵐惠三郎 |
| 音川鉄馬 | 高橋丑吉 | 齋藤よね | 池上直人 | 福島繁明 | 太田資光 |
| 古川政藏 | 元木民之助 | 中村家起 | 山崎龜五郎 | 相澤順之助 | 猪狩吉春 |
| 築瀨重則 | 柴山てつ | 關嶺忠武 | 猪原忠壽 | 福原忠壽 | 猪原忠壽 |
| 矢島重則 | 伊藤勝吉 | 關嶺忠武 | ▲城ヶ澤 | 一瀬朝春 | 猪原忠壽 |
| 渡部知義 | 關嶺忠武 | 關嶺忠武 | 福澤左次郎 | 平本卯之吉 | 中村宗興 |
| 羽島彌平 | 山川左取 | 山川左取 | 神林勝義 | 神林勝義 | 大岡雄孟 |
| 佐久間直次郎 | 箕輪醇 | 箕輪醇 | 福澤三九郎 | 福澤三九郎 | 大場源太郎 |
| 村田龜之助 | 村田猪之吉 | 村田猪之吉 | 笠間三九郎 | 笠間三九郎 | 河原田幸助 |
| 武井永喜治 | 加藤友三郎 | 加藤友三郎 | 武川總之助 | 武川總之助 | 渥味忠右工門 |
| 濫谷源藏 | 金澤慎八 | 金澤慎八 | 平野九郎右工門 | 平野九郎右工門 | 相原幾之助 |
| 森代祐之助 | 吉田余之進 | 吉田余之進 | 名倉房吉 | 名倉房吉 | 渡邊房藏 |
| 辻辰次郎 | 山本里介 | 山本里介 | 河村梯藏 | 河村梯藏 | 岡部房藏 |
| 森山源之丞 | 森山源介 | 森山源介 | 山田梯藏 | 山田梯藏 | 一瀬勘三郎 |
| 阿部庄治 | 外島吉五郎 | 外島吉五郎 | 佐藤ゆき | 佐藤ゆき | 吉川良藏 |
| ▲本町 | 住 伊藤彦太 | 住 伊藤彦太 | 上野悦藏 | 上野悦藏 | 安藤彦太郎 |
| 大庭庄之進 | 住 伊藤彦太 | 住 伊藤彦太 | 管則貫 | 管則貫 | 今泉利秀 |
| 池上直人 | 福島直壽 | 福島直壽 | 石黒權之助 | 石黒權之助 | 鹽澤則忠 |
| 依田久米 | 草刈權右工門 | 草刈權右工門 | 加藤利助 | 加藤利助 | 井形佐太郎 |
| 市川佐兵衛 | 中澤英之進 | 中澤英之進 | 渡部早太 | 渡部早太 | 山田清右工門 |
| 水島直江 | 宗像源左工門 | 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| ▲濱町 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 加藤利助 | 加藤利助 | 山田清右工門 |
| 渡部傳之進 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 木本彌惠右工門 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 垣内千代松 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 倉澤忠輝 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 弓田彈治 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 伊東友治 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |
| 三宅内匠 | 住 宗像源左工門 | 住 宗像源左工門 | 渡部利助 | 渡部利助 | 山田清右工門 |

『下北新報』大正14年10月11日

明治十六年現在の田名部在住者は次の五拾名軒で外に各村々にも五軒、三軒と在住してあつた。

- | | | | | | |
|-------|-------|--------|--------|-------|--------|
| 小池誠成 | 齊藤六三 | 小杉茂 | 小池漸 | 戸枝鉦次郎 | 齊藤林藏 |
| 清野義教 | 鷹箸哲生 | 長坂真次郎 | 橋本伴治 | 二瓶勝介 | 山田尚一 |
| 和田茂 | 阿部カイ | 荒川ツネ | 東平治 | 渡部新藏 | 石井勝吉 |
| 山田イシ | 星安次郎 | 渡部四方之助 | 馬場佛治 | 大東エツ | 遠山浄 |
| 赤羽親忠 | 上遠野義雄 | 松本義賢 | 坂井次平 | 水野昇 | 津川西彦 |
| 小沼武功 | 山浦壽次郎 | 伊波志建馬 | 森徳造 | 森初太 | 中田誠多 |
| 木間武三郎 | 橋爪寅之助 | 高津次盛 | 赤川清之助 | 鈴木治八郎 | 小島留彦 |
| 太田則順 | 吉川萬代太 | 坂橋ミエ | 今村金右衛門 | 木村鉄吉 | 五十嵐忠三郎 |
| 大内豊治 | 小町屋庄藏 | 島影ヨフ | | | |

姓澤龜井 『下北半島』 昭和十七年十月撰撰三版



風吹きて斗南ヶ丘の蕎麦の花さやけき揺れが白波となる

三浦 順一郎